

# 児玉文庫開設から九十有余年

会 員 小 川 宣

はじめに

今年一九九四年は、日清戦争が始まってから丁度百年、日露戦争が始まってから九〇年になる。この一〇年の間に、軍人として政治家として活躍した児玉源太郎陸軍大将が、郷土徳山に後進の育成のために、近代的図書館としての機能を備えた「児玉文庫」を開設したことは実に驚くべきことである。さらに、このことが直ちに今から九〇年前のロンドンの日英新聞で紹介されたということ、一層その感を強くした。

源太郎は、少年時代を徳山で過ごし、安政六年（一六五）八歳の時に藩校興讓館に入り、文学を徳山藩国学の祖である桜井魁園と本城清について学び、撃剣を無

念流小田劫右衛門と一刀流浅見栄三郎に、槍術を大島流浅見安之丞について学んだ。

この外に儒学者で教学院主である島田蕃根についても学び、中でも文武に秀でていた源太郎の姉婿である次郎彦の影響が大きかったといわれている。その体験から若い時の学問が大切で、特に読書の必要性を感じたようで、早くから本を集めて郷土の人々に読んで欲しいという夢をもっていたという。

この夢は、日露戦争開戦一年前の明治三六年（一八九三）に文庫開設ということで実現した。その当時の源太郎は陸軍中将で、台湾総督のかたわら第三師団長・陸軍大臣を兼任・歴任し、政治の中枢にあつて実に多忙な

中での文庫の開設であるだけに、一層の感動を覚えるものである。

#### 児玉文庫の由来

この文庫は、明治三五年一月一七日に、源太郎が当時の徳山本丁にあった旧宅「藤の園」を記念するため、友人の河野通好を代人として「私立児玉文庫」の設立を文部大臣に申請し、開設の運びとなったものである。

その資金については、明治三〇年（一八九七）に孝明天皇の皇后である英照皇太后の崩御の際に、陸軍次官であった源太郎は葬儀の重任を果たした。そこで宮中喪が明けると、皇室より金一封が下賜されたので、これに若干の金子を加えて、旧邸を払って「藤の園」と命名し、皇室のご恩を永久に記念し、併せて郷里徳山の人々を啓発するために設立したという。

その一切の経営を河野通好と野村恒造の二人に委嘱し、同三五年四月より書庫・閲覧室・事務室及び管理者住宅の建築工事に着手し、同年一月にその工事が

完成した。同年一月一七日に源太郎は、次のような「私立児玉文庫」の設立を文部大臣に開申した。

#### 私立文庫設置ノ儀ニ付開申

今般拙者ノ所有ナル山口県都濃郡徳山町第四千二十八番地内ニ於テ文庫ヲ設置シ、図書及ヒ新聞紙ヲ衆庶ノ縦覧ニ供シ候ニ付、別紙規定及ヒ縦覧人心得、経費支出ノ細目、敷地、建物ノ略図各巻葉ヲ具シ此段開申候也

明治三十五年十二月十七日

山口県都濃郡徳山町第六百三十七番屋敷

設立者 男爵 児玉源太郎 印

山口県都濃郡徳山町第六百八十四番屋敷

右代人 士族 河野 通好 印

文部大臣理学博士 男爵菊地大麓殿

#### 開庫式の模様

明治三十六年一月二三日午前一〇時に開庫式が挙行され、まず設立者児玉源太郎男爵より、児玉文庫の設立

の趣旨及びその由来についての演説があり、ついで都濃郡長古沢義三郎・都濃郡会議長磯部十蔵（県会議員・衆議院議員）・河野通好の祝辞演説があった。

終わって男爵より参列者一同に立食の響応があり、この日の参列者一同よりは、庭園備付灯笼一基を記念として寄付することが決議され、男爵は快くこれを受け入れられた。

### イギリスの日英新聞で紹介

この文庫の設立に関して、一九〇三年三月にイギリスで発刊の「The Anglo-Japanese Gazette」と「児玉文庫」と題する記事で紹介された。

この新聞は、通称「アングロ・ジャパニーズ新聞」といわれているもので、「日本の公共図書館・児玉文庫」と題して源太郎の軍服姿と源太郎夫人の大写しの写真入りで掲載されたものである。児玉文庫が開設されたのは、その年の一月で、その僅か二ヶ月後にロンドンの新聞で紹介されたというのは、当時としては実に驚くべき早さである。掲載された原文を日本語に訳

すと、およそ次の通りであるが、文中明らかに年代等の誤っているものと補足を要すると思われるものは、（ ）で補うことにした。

「世界的に有名な日本の内海（瀬戸内海）を縁取る海岸に沿っている数多くの素晴らしい景色の中で、下松からフツカワ（福川）に広がる岩をちりばめ松に覆われた海岸は、壮大さにおいて他に勝るものは日本には多分ないであろう。

これら二つの場所の真ん中に位置しているのが、徳



1903年発刊の日英新聞

川將軍（江戸幕府）の毛利藩遠征（幕府の長州出兵）の最初の結集基地の場所として重要なところであった徳山である。ここは児玉男爵の生誕地であり、彼が最近、公共図書館を設立したのは、このような環境の中であつた。建物が建設された場所は、四〇年前まで児玉男爵の先祖代々の屋敷の一部であつた。

—— 中 略 ——

児玉男爵は、武將や政治家としてよく知られているけれども、金儲け上手と人呼ばわれする人では、決してなかつた。時の皇太后が死亡した一八九八年（実は一八九七年・明治三〇年）彼は戦争の次官の官職に就き、彼の地位の徳行により、葬儀委員の一人に任命された。宮中喪の後、彼は皇室からお金を授かつた。

こうして得られたお金は、他のお金と共に、彼が長い間希望していた購入計画（図書）を達成することになつた。こうして彼は昨年の終わりに向けて本を収集することができ、以来、徳山の町の所有物として永久に保存されている図書館に集められたのである。

建物は、これ見よがしの特徴は決してないが、本の取り合わせがうまく選択されている。保管人は、この新聞の読者が関心をもつて贈ってくれるどんな英語の作品の寄贈でも歓迎している。

こうした児玉男爵の努力は、確かに称賛されるべきもので、児玉男爵よりもっと裕福な日本の多くの人達によつて受け継がれていく、国民的教育の方向付けたる教材として、価値あるものである。この記事と一緒に掲載されている写真に対して、児玉男爵の子息にあたり、日本政府ロンドン事務所で財政担当官をしている児玉秀雄氏のご好意に恩義を受けている。」

充実した文庫

明治三五年の児玉文庫の創設に際して、かつて幕末維新に源太郎と行動を共にした金子正煥は、特に藤園將軍（源太郎）の委嘱を受け、文庫の管理者として三年間にわたつて鋭意経営に当り、その基礎を確立するのに預かつて力があつたという。

ついで、明治三九年（一九〇六）七月二四日、源太郎が

亡くなったので、その子秀雄が後継者となり、翌四〇年六月には都濃郡よりの資金援助で閲覧室と書庫の建築に着手し、同年九月に竣工、建坪も七四坪になった。

この文庫の蔵書は、有志の寄贈によるものと、藩校興讓館蔵書の小学校に伝わったものを引き継いだものからなっていたという。当初の冊数は分からないが、最初の記録である明治三八年には八八四〇冊あり、その後年を追うごとに充実し、昭和一六年には四二一七四冊に達したという記録がある。

一方、文庫の増改築も進められ、大正一五年（一九二六）には工費三千円で、設備の改善と大修繕が行われた。

さらに、昭和一〇年には文庫が狭隘となり、その上付属家屋が腐朽したので、在来の付属家屋を解体して新たに本館四一坪の増築と別館物置等の新築にかかり一二月に竣工し、併せて庭園を改造して洋式の小公園にしている。

この文庫に関しては、皇室の関心も高かったようで、明治四一年四月一二日に東宮殿下（大正天皇）が行啓

され、大正一五年五月二八日に皇太子殿下（昭和天皇）の中国地方行啓の折りにも、甘露寺侍従をわざわざ文庫に派遣されている。

庭内には行啓記念樹・児玉大将産湯の井戸や児玉次郎彦遭難の石碑等の遺跡があったという。この中で、皇太子殿下が侍従を派遣されたのを記念して、植樹された折に建立された「皇太子殿下侍従御差遣記念樹」と記された標石と、産湯の井戸と「児玉大将産湯之井戸」と記された標石は、今も大切に保存されている。

#### 文庫の価値と「人間児玉源太郎」

源太郎は、ロンドンの日英新聞に掲載された記事からも推察できるように、今の政治家の金権体質からは程遠く、金儲けと無縁の政治家だったようである。また、あらゆる面で決してこれ見よがしの見栄はなく実質本位であり、青少年に必要な本を集めて後輩を育てることが夢だったようで、所蔵された書物の中に文学や語学関係が多かったことも着目される。

さらに、この日英新聞の記事にも示されているよう

に、源太郎の努力は確かに称賛されるべきものであり、郷土愛からほとぼり出る人材育成の教材として価値あるものだったといえよう。

一方この文庫は、当時の地方文化の向上発展に寄与する活動も積極的にやっていたようで、昭和十一年二月に開催された「王政復古七十年維新史料展覧会」を徳山市と共に主催している。

このように、明治時代に活躍した徳山ゆかりの人々の中で、功なり名とげて郷里の人々のために貢献した人が何人かいるが、その中でこの文庫の果たした役割りは極めて大きかったといえよう。

残念なことにこの文庫の建物は、戦災ですっかり焼失してしまったが、この文庫の存在を知るよすがとなるものが幾つか残っている。当時の「児玉文庫」と記された表札と本を貸し出す時に使用された木箱がある。また、当時の庭園にあったという、山県元帥が児玉大将の死を惜しんで詠まれた

越えはまた里やあらむと頼みてし

杖さえ折れぬ老の坂みち

という石碑が児玉神社境内にあつて、源太郎の遺徳を偲ぶことができる。

さらに昭和二年、源太郎が台湾総督時代に民政局長を勤めた後藤新平が、児玉神社を参拝した折りに文庫を訪れ往時を偲んだという。その時の

往時茫茫都似夢 毎思家国忽思君

昭和二年四月七日 後藤新平

と記した記念碑が今も児玉神社境内にある。

最近、いろんな分野で児玉源太郎が登場してくるが軍人として政治家として評価すると同時に「児玉文庫」の存在を通して、文化性の高い「人間児玉源太郎」として高く評価したいものである。

(一九九四年七月記)

〔参考文献〕

- 徳山市史料下
- 徳山の文化に貢献せし人々
- 徳山市史年表
- 一九〇三年発刊「日英新聞」